

## 2 四季とともに



## 大正時代のある客車のなかで

大正時代中ごろの冬、倶知安から小樽へ向かう列車の車内の風景です。ニシン漁場へ出稼ぎに行く人、農家の人、職人、商人、夫婦と子ども、学生などが乗り合わせています。列車内には石炭ストーブが置かれています。乗客たちの服装には、綿入れ、刺し子、つまごなどの伝統的な農漁村の冬の服装に加え、頭巾、<sup>かくまき</sup>角巻や二重まわしなど和服形式の防寒着がみられます。背広や学生服、マント、オーバーなどの洋服や、革靴などがしだいに普及している様子もうかがえます。

19世紀後半ごろから、たくさんの人びとが北海道へ移り住んできました。そのほとんどは、故郷よりも豊かなくらしを夢みて、津軽海峡を渡ってきました。ただ、四季の環境が故郷とは異なるなかで、誰もがその夢をかなえたわけではありません。とくに、冬のくらしは生死に関わる大きな問題で、家を暖めることと、降り積もる雪に備えることが必要でした。ところが20世紀になっても、暖房は炉や火鉢にたより、ただ雪をふみ固めるだけですませる家もありました。しかし、大正ごろになると、しだいにストーブやいろいろな除雪の道具などが広く使われるようになります。

北海道でも、元旦から大晦日まで、季節ごとにさまざまな行事が行われてきました。とはいえ、北海道らしい特徴もたくさんみられます。例えば、正月に家の玄関に飾る〈しめ縄〉は、本州では主に稲わらを使いますが、北海道ではスゲなどで代用されることもありました。本州より寒いため、明治時代後半ごろまでは稲があまり育たなかったからです。また、夏の風物詩である七夕を、7月7日に行う地域と8月7日に行う地域があります。さまざまな地域からの移住者がいたことも理由の一つです。

北海道の開拓が進むにつれて、大きな街を中心に、飲み水、病院、学校、神社、寺のほか鉄道など交通網も整えられていきました。これらはしだいに農村や漁村などへも広がっていきました。そして、明治後期から大正にかけて、人びとのくらしは大きく変化しました。例えば、厚手の毛織物製の防寒服が利用されるなど、和装から洋装へと服装がしだいに変わっていきました。トマト、キャベツ、タマネギ、ジャガイモ、ミルク、バター、チーズといった洋風の食材も取り入れられました。建物にはトタン屋根、ガラス窓が使われるようになり、電灯も普及していきました。



## 部屋をあたためる

江戸時代の終わりに、箱館（現在の函館）で〈カッヘル〉とよばれた日本ではじめてのストーブがつくられました。一般の人びとにストーブが広まるのは、明治時代の後半に値段が手ごろなブリキ製の薪ストーブが市販されてからのことです。また、石炭ストーブは、大正の終わりから昭和のはじめごろにかけて、暖かくて便利な国産の貯炭式石炭ストーブが大量生産されるようになると、北海道で広く使われるようになりました。北海道の寒い冬を暖かく過ごす生活がこうして芽生えていきました。



## 雪をはねる

玄関から道路までの除雪には、〈カエスキ〉〈コスキ〉〈ジョンバ〉などとよばれた木製や竹製の道具や、鉄製のスコップが使われました。また、農家など除雪の範囲が広い所では、馬にひかせる〈三角そり〉など、雪をふみ固める道具もみられました。1950年代になると、鉄道の駅構内などで〈雪押し〉という道具も使用されるようになりました。これはその後、〈ママさんダンプ〉や〈スノーダンプ〉などの名称で商品化され、北海道内外の積雪地域に普及しました。